

今朝から「コリントの信徒への手紙二」に入ります。この手紙の著作場所ですが、手紙一の方はエフェソだったのですが、手紙二の方はマケドニアで書かれました。パウロはマケドニアでテトスに会いそこで二を書いたのです。マケドニアはギリシャの北の方角です。書かれた時期はADの57年ごろと言われています。手紙一から余りたっていないころでした。いずれもパウロが第3回目の伝道旅行の際書かれたのです。この手紙が書かれた動機は、偽教師がコリントの教会に乗り込んで来て教会をかく乱し、大変な事になっていたからでした。パウロは心あるコリントのクリスチャン達から伝え聞いており心いためていたのです。パウロが心配するのは自分の事ではなく、彼の愛するコリントの教会の人々が嘘を信じ悪の力が教会にはびこることなのでした。そのことに対するパウロの抗弁と、またそれだけではなく、信仰の根本的な真理や教えパウロの使徒職についても語られています。

パウロはコリントを訪問する時に旅程を変更したようです。それで、12節から22節までパウロの弁明になっているのです。コリントの信徒たちは不満を口にしました。「パウロ先生は約束を守らない人だ」「真実でない人だ」と批判したのです。パウロはこれまで2度コリントに行っており、今回3度目の訪問を予定していたのです。ところが、コリントの信徒たちの中でパウロを何らかの理由で侮辱する人がおり、それで行くことを見合わせていたのです。パウロは、初めはコリントを訪問すると言っておきながら「然り」YES そうです、その通りです、と言っておきながら、今度は「否」NO 行かない、と言う。パウロは約束不履行をすると非難したのです。パウロは必死で抗弁します。神は真実な方であるから、神は何でもご存じであるからこの真実な方によってパウロは申し開きをしたのです。外国の映画を見ると、裁判所で聖書の上に手に置いて、宣誓する場面があります。「私は嘘、偽りは申しません」と誓います。このように神は真実であり、アーメンの神であり然りの神であるとパウロは神にかけて誓います。パウロが書いた手紙で「涙の手紙」があるのです。その手紙はすでになくなってしまったので読むことは出来ないのですが、2章の4節に書かれています。「わたしは、悩みと愁いに満ちた心で、涙ながらに手紙を書きました」と言っています。これは恐らく、パウロを侮辱する信徒がいて、もしそちらに行くならパウロの気性から言って、厳しく裁くと考えており、それを回避するためにコリント行きを延期したようなのです。そのことが、12節から2章の11節まで長く説明しているのです。そして、22節にはこのようにあります。「神はまた、わたしたちに証印を押して、保証としてわたしたちの心に“霊”を与えてくださいました」とあります。この証印を押す、ということは、例えば、商人が売った商品の品質が確かですよということを証明するという意味なのです。それで証印を押すのです。この商品は偽装商品ではありません、と品質保証するために証印を押すのです。ですから、神は真実です、とわたしたちに証印を押して、その保証として、神は霊をくださった、と語ります。けれど、その保証は手付金や担保の意味であって、その人がまったく100%救われたという意味ではないのです。残金が支払われる時は、その人の地上の生涯が終わって神のみ元に行く時か、或いはこの世の終末が来る時かです。そして、すべての人に残金が支払われるのではなく、その人の地上の生涯において、神のみ旨に適う人に残金が支払われるのです。この世の生涯はまだ手付金の時代であって、人は神から保証としての霊を受けながら、残金をいただけるよう常に神を見上げて歩まなければならないのです。ですから、12節にあるように「わたしたちは世の中で、とりわけあなたがたに対して、人間の知恵によってではなく、神から受けた純真と誠実によって、神の恵みの下に行動してきました。このことは、良心も証しするところで、わたしたちの誇りです」と言っています。純真と誠実によって神の恵みの下に行動することがいかに大事であるかと思えます。このパウロの言葉は人間の基本的な姿勢ではないでしょうか。創世記に神が人間を創造された時、命の息を吹き

かけられた、とありますが、その命の息とは、神の真心、純真と誠実や他の靈的なものもあるでしょうが、その靈によって人間は生きる者となったのです。私は以前本当に励まされました。こんなに信仰者は強いものかと思いました。今から12年前に起こった東日本大震災に、パウロの言うように「イエス・キリストは『然り』と同時に『否』となったような方ではない」ことを、身をもって体験した方々がおられたのです。神はこのような悲惨な状況にあっても「否」となったお方ではなく、かえってそのような現場の中にあっても、いやそれだからこそ、イエスさまは光り輝き、「然り」の神にもなる、そのようなことを覚えました。然りという意味は辞書を引くと、そうだ、その通りだ、と多くの感動の気持ちを表す、とありました。然りの神はそうです、その通りです、と感動をあらわす言葉なのです。その当時の『信徒の友』にもありましたが、津波が襲って多数の尊い方々が行方不明になったり、亡くなったりした中で、日本中からまた外国からも助けられ救援物資をいただいて命を繋いだことは、神は「否」の神ではなく、人を助ける「然り」の神だった、とある牧師さんは語られました。20節を読むと「神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して「アーメン」と唱えます」と言います。これを言うにパウロはどんな困難試練にもめげず、告白したのです。私はふっと考えます。もし私があのような大地震にあったら、何もかも失ったら果たして、神は「然り」の神になっただろうか。「否」の神になったのではないか。どうなるかわからないけれど、あまりきれいごとを言うのも好きではないのです。作家の曾野綾子さんがおられて、カトリックの方ですが、あまりその人の本は読んだことはないのですが、あの方は本当のことを言うのです。きれいごとは決して言わない人です。それが政治姿勢にもよく現れています。その点好感を持ちますね。そして、私はこのような祈りはすると思います。「神さま、どうしてこのような目に合わせるのですか、ひどいではないですか、神も何とかもない」そう祈って深いどん底に落ちるでしょう。しかし、やがて時がたつと立ち上がって持ち直すのです。その時、神は「否」ではなく、力を与える「然り」の神になるのです。釜石で地震にあった牧師さんは言われました。「これまで、私たちは普段から神様に祈ってきました。それは何のためだったのか。まさにこの時のためだった。普段から心の中に入っているみ言葉、祈りが非常時にどれだけ助けになったか、イエスさまは終末の徴を預言してこう言われました『屋上にいる者は家にある物を取り出そうとして下に降りてはならない。畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない』これは津波が襲ってきた地域で大事な主イエスの忠告でした。これが現実になった。ですから主イエスのお言葉は真実なのです」と言われていました。富士山もいつ噴火するかわかりません。噴火したら火山灰で相当こちらまで大変でしょう。その時に備えて御言葉を養いたいと思います。

私は実はまだ若かりし頃、あまり聖書は読んでいなかったのです。ところが、ある日、ある新聞を読んで反省したのです。どこの新聞にも連載小説が載っています。その話をしますと、ある少年が電車のレールに石を置いて列車を転覆してしまう事件を起こしました。その少年は刑務所に収監されて服役中いろいろな本を読んだのでした。中でもとりわけ聖書を熱心に読んだのでした。凡そ、3か月くらいで聖書1冊読破したと書かれていました。私はその頃、教会に行っていましたが、信者なのに聖書1冊も通読していませんでした。反省しました。それで、聖書日課に従って毎日読みました。ある牧師は言うのです。「私は7回通読しました」と言われたので、7は完全数でもあるので7の2倍を目標にして読みたいと思っているのです。3月31日で聖書一卷終わりになります。でも、考えるにあの少年は本当に3か月で読み終わったのかしら、と思いますよ。新約聖書はまだいいですけども、旧約聖書は読むに困難ですね。カタカナが多いですし、内容が複雑なのでメモ書きしないとごちゃごちゃになります。註解書を読んでも更にわからなくなるし、誰か教えてくれる人がいないと難しいのではないのでしょうか。わからないところは飛ばして読みます。私は七里に来た時に読むようにしているのです。一日の内、時間を決めて定期的に読む習慣をつけるといいのではないのでしょうか。1冊読み終えたらご褒美に何か好きなものを食べたり、買ったりして。あの少年はそんなに忍耐と知恵とがあるのだったら、何か他の事に回したらいいのに、なぜあのような大それたことをしたのでしょうか、そして聖書を読んで反省し、悔い改めの懺悔を神

さまにしたのでしょうか、そこが問われます。ただ普通の本として読んでそれで終わりでは困ります。箴言 1：7に「主を畏れることは知恵の初め」とあります。まず最初に天の神を信じ、イエスさまに従うことが知恵の始まりになるのです。あの少年と言っても、もし、実在であったら、今は大分大人になっているとは思いますが、刑期を終えたら是非、教会に行かれて本当の知恵を知ってもらいたいと思います。

さて、本筋に戻りますと、パウロは本当に苦心しました。教会はイエスをキリストと信じる群れであるから皆お互いの気持ちがわかって争いもなく、穏やかに過ごして心と心のきずなも深く結ばれている信仰共同体だと思いきや、あにはからんや実際はそういうところではないのです。教会は神の国そのものではなく、神の国の写しなのです。ですからコリントの教会のようないざこざが起こり、世俗の人たちと同じような過ちも起こし、礼拝の秩序もきちんと定まらないで勝手に話したり、終わらない内に話し出したり、聖餐式も時間が決まっておらず早く来る人もいれば、仕事帰りに遅くしか来れない人もいたし、余裕のある人はごちそうを食べ、貧しい人奴隷は質素な食事をし、いろいろでした。でもそのような中でも祈り、詩編を読んで主を賛美し、ある人は預言し霊を与えられてそれぞれが帰ったのです。しかし、初代教会から2000年もたち教会は変遷を遂げ、制度も秩序も大分整えられてきました。教会に諸規則が出来それによって教会の運営をするようになったのです。教派(宗派)によっても違いますが、日本基督教団はいろいろなことが会議制によって決められており、主権在民の考えのもとに他の言葉で言うと、民主主義とも言いますが、一人の意見ではなく、幅広く意見を聞いて採決をするという考えが、主のみ心をあらわす方法だと考えられてきたのです。教会が愛と寛容の世界であり、またそうでなければならぬことは言うまでもないことですが、だからと言って自由気ままで勝手放題というわけにはいきません。教義、運営方針、教会規則、礼拝の守り方などの決まりがあって、教会に集う人々は皆それに従って信仰生活をしています。教会は誰でも自由に来ることは出来ますが、教会の一員になるということは、その教会の規則に従う義務もあるのです。これから洗礼を志願されている人は、謙虚な気持ちで先輩方を敬い、群れに加えられるならば、きっと皆さん方から喜ばれこの群れの一員として迎えられるでしょう。そして、神さまから大きな祝福を与えられるでしょう。神は「否」の神ではなく、「然り」の神なのです。